

## INTERVIEW

社会医療法人関東会 会長  
長松宜哉先生



# 地域包括ケアシステムを拡げ、 大分県の実地医療を守る

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

## 佐賀関病院との縁

山田隆司(聞き手) 今日は大分県の佐賀関病院に長松宜哉先生をお訪ねしました。長松先生とは先日大分市で行われた第35回九州地域医学研究会でお目にかかったのですが、大分県の自治医科大学卒業生が大勢、先生の組織と一緒に仕事をされていることを知り、ぜひそのお話を伺いたいと考え、今回訪問させていただきました。

まず、先生が卒業されて佐賀関病院に至るまでの経緯を紹介していただけますか。

長松宜哉 昭和54年に自治医大2期生として卒業し、大分県立病院で初期研修後、昭和56年から、今はもうなくなってしまいましたが、豊後大野市の県立三重病院に赴任しました。当時はまだ結核療養所の時代で、医師は前大分県立病院長だった徳岡三郎院長と自治医大から派遣された

前沢政次副院長と一期生の竹田津文俊先生と私の4人でした。前沢先生はすぐ5月に自治医大に帰られ地域医療講座を立ち上げました。その後任として血液内科から飛田系太先生が赴任されました。

山田 病床はどのくらいあったのですか。

長松 200床くらいですね。

山田 療養所だから、長く入院していらっしゃる人も多いですね。

長松 結核患者さんが多かったですね。何十年もそこにいる人もいました。そこでいろいろな経験をさせてもらいました。

大学から前沢先生が赴任されたのはどういうことかということ、自治医大がいずれそこを卒業生の拠点病院にしたいという希望があったのだ

と思いました。

**山田** なるほど、そういうことだったんですね。そこには何年いたのですか。

**長松** 2年です。その後前沢先生が立ち上げた自治医大の地域医療学講座で、1年間後期研修を行いました。それからまた県立三重病院に3ヵ月戻って、その後新設の本匠村立因尾診療所というへき地診療所に初代所長として赴任しました。山の中で猪や鹿しかいないという感じの林業中心の地域でした。それでも外来は日に30人くらい来ていました。在宅医療も積極的に行いました。そこに2年いて、また県立三重病院に戻るのかなと思っていたところポストがなく、この病院に来ることになりました。

**山田** ここは国保の病院だったのですか？

**長松** そうです。佐賀関町国民健康保険病院で当時80床くらいでした。この向かい側に大きな煙突が見えたかと思いますが、ここは銅の製錬所では国内トップクラスの佐賀関製錬所の企業城下町なのです。その企業が運営する製錬所病院も当時ありまして、この地域には製錬所病院と町立病院という同じくらいの規模の2つの病院があったのです。その当時、製錬所病院が経営不振で閉鎖するので町立病院と合併できないかということになり、着任して2年目に町立病院が吸収合併することになり130床くらいの病院にな

りました。

**山田** 職員も公務員と民間の職員が一緒になったわけですね。

**長松** そうです。かなり難しいところがありました(笑)。

結局義務年限が明けるまでの3年ここにいたのですが、義務明けはどうしようかと考えていたときに、父親が病気で亡くなり母親が大分にいてほしいと言うし、当時の町立病院の院長とはあまり合わなかったので、市内にあった私立の医療法人の大分共立病院に副院長として入職しました。ところが町立病院からどうしても帰ってきてほしいという話があり、副院長として責任ある役割を任せてもらうことを条件に、平成2年11月に町立病院に戻りました。

**山田** そのときは自治医大の卒業生はほかにいたのですか。

**長松** 義務年限内のローテーターがまわっていました。

**山田** 先生は副院長として、どんなことを目的とされていたのですか。

**長松** 私としては自治医大の卒業生を正規の職員で入れたいと考えていたのですね。いずれは小さいながらも自治医大卒業生の拠点病院になればいいなと思っていました。それから少しずつ人数を増やして行って、ローテーターとは別に3人くらいに増やすことができました。

## 関愛会の誕生

**長松** 私がここに戻ってからずっと、老朽化した病院建物の新築という課題がありました。そのためには病院の経営状態をよくする必要がありました。人件費などが高く軌道にのりませんでした。平成12年に介護保険制度が導入されたの

を機にデイサービスセンターと保健センターをつくって、責任者として運営したところ、収益が増加し、経営状態も良化していきました。病院新築についても具体的に計画しようという話も出てきていました。